

小諸高原病院でプラネタリウム

入所者向けに

小諸市甲の国立病院機構小諸高原病院で10月29日、入院する重症心身障害者・児65人のために「院内プラネタリウム」が開かれた。病院でプラネタリウムを上映する活動をする高橋真理子さん(45)＝甲府市＝が部屋の壁に星空を再現したコンピュータグラフィックス(CG)の映像などを映し、入所者たちは笑顔や真剣な表情で眺めた。

同病院によると、重症心身障害者・児は安全面などから夜間の外出が難しく、星空は窓から眺められる程度。若林信久事務部長が5月ごろ、高橋さんを支援する企業のウェブサイトで活動を知り、同病院でもやってもらえないか—と高橋さんに依頼、上映

が実現した。

午前、午後に約30人ずつ観賞。高橋さんはパソコンとプロジェクターを使って星空を映し出し、「きょうの夜時に小諸から見える星空です」と説明。まるで地球から遠ざかる宇宙船から見るように、地球の全景や、火星や木星といった惑星、銀河系などの姿を見せた。

4歳から80代までいる入所者は、車いすに座ったり、布団に寝たりしながら幻想的な映像を見つめた。上映が終わると「きれいだった」、「良かった」とほえんだ。

(信濃毎日新聞・長野 2015年10月30日)

災害対応カードで確認

読売療育賞

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第11回読売療育賞」(読売光と愛の事業団主催)で、仙台市青葉区の医療型障害児入所施設「エコ療育園」が敢闘賞に選ばれた。災害時の対応方法を記したカードの導入が評価された。東日本大震災を経験した岩手、福島両県の施設との共同研究で考案されたもので、始業前に職員同士で出題し合い、防災意識の向上などに役立てているという。

「火災発生! 排煙装置の場所は?」

「点滴中の避難方法は?」

30枚あるA4判のカードには、表に質問、裏にその対応方法が書かれている。エコ療育園では3か月間にわたり、始業前のミーティングで、職員に3問ずつクイズ形式で回答してもらった。所要時間はわずか3分だが、導入前後で比べると、知識が身につく、防災意識が向上したという。

共同研究した看護師・菊地佐江子さん(38)は「確実にみんなの態度が変わった」と力を込める。例えば、消防訓練では、以前なら職員は担当者の指示に従って動いていたが、カード導入後は一人ひとりが役割を自覚し、迅速に行動できるようになったとい

う。

研究のきっかけは、都内で行われた長期研修で、同じような施設で働く岩手、福島両県の看護師と出会ったことだ。それぞれ震災を経験したことで、寒い屋外で低体温に気をつけたり、断水で手洗いができない中で感染を予防したりと、災害時に必要な対応方法を把握できていた。

さらに意思表示や自力で動くことが難しい重症心身障害児は、移動に時間がかかるうえ、人工呼吸器や点滴など医療処置も多く、専門的な知識も必要だ。菊地さんらは「本当に役立つカードを作ろう」と内容を練り上げたという。

今でも消防訓練を行う1か月前になると、職員たちは始業前にカードを使って対応方法を確認する。非常時の指揮系統についてなど、内容は職員からの意見を反映させて少しずつ改良している。菊地さんは「続けることで防災意識は維持・向上する。質問内容を工夫すれば、ほかの施設でも応用できるはず」と話している。

(読売新聞・宮城版 2015年11月6日)